

R. Wagner

R. ワーグナー

楽劇『ニュルンベルクのマイスタージンガー』WWV.96 より
第1幕への前奏曲

Vorspiel zu Die Meistersinger von Nürnberg

奏
演
同
合

『ニュルンベルクのマイスタージンガー』はR. ワーグナー (1813 ~ 1883) によって作曲された楽劇で、彼が作曲したものの中では珍しく、喜劇として作られたものです。1867年に完成されたこの作品は、16世紀に実際に活躍していたマイスタージンガーであるハンス・ザックスを中心に据え、史実に基づきつつドイツ民衆芸術を高らかに歌い上げるものとなっています。マイスタージンガーとは、15、6世紀の頃に存在した徒弟制度に基づくもので、手工業を本職としながらも詩人・音楽家として活躍するマイスター（親方）を指しており、日本語では「親方歌手」などと訳されているものです。

物語はマイスタージンガー達による歌合戦を巡って展開され、騎士ヴァルターと金細工師の娘エーファとの恋物語が描かれるにおいてもこの歌合戦が重要となってきます。最後はザックスの助力によりヴァルターがマイスタージンガーの称号を得てエーファと結ばれるハッピーエンドで、ドイツの芸術作品が輝かしく賛美される中で、ヴァルターの人間味溢れる性格が光る素敵な筋立てとなっています。

ワーグナーの楽劇ではしばしば動機にある程度の性格付けがなされてありますが、それはこの作品においても例外ではありません。作曲者自身が「作品の精髓」と称していた『第一幕への前奏曲』では、作品全体において用いられる様々な動機が姿を現し、それらが見事なまでに一つの曲に結集しています。

冒頭は力強く決然とした「マイスタージンガーの動機」によって始められ、ハ長調の祝祭的な響きによってマイスタージンガー達の誇りや威厳が表現されます。これに続いて、ヴァルターとエーファの「求愛の動機」が木管楽器群によって歌われ、それらが高まったかと思うと「組合の動機」が金管楽器によってもたらされます。この動機から広がったかと思うとそこに雄大な「芸術の動機」が現れ、ホルン・ヴィオラ・チェロの対旋律と共に高らかに歌い上げられます。しばらくすると幾分か落ち着いた雰囲気が訪れ、ヴァイオリンにより「愛の動機」が奏でられ、それが発展し「衝動の動機」となりそれらは絡みあいながら展開部的な性格を持つ中間部へと流れ込みます。

中間部では冒頭の「マイスタージンガーの動機」が木管楽器によって再び演奏されますが、ここでは歌合戦のライバルがヴァルターを貶めようと画策しており、冒頭で示された威厳はどこへか消え去っています。同じように「芸術の動機」も木管楽器によってからかいの表情で示され、「哄笑の動機」とともに曲は一段と盛り上がりを見せます。そうして高まったところへ今までの動機が再現的に重なり合い、コーダで再び「マイスタージンガーの動機」が歌われ輝かしいままに曲は締めくくられます。

(文責：志方洋介)